

埼玉県大学・短期大学図書館協議会

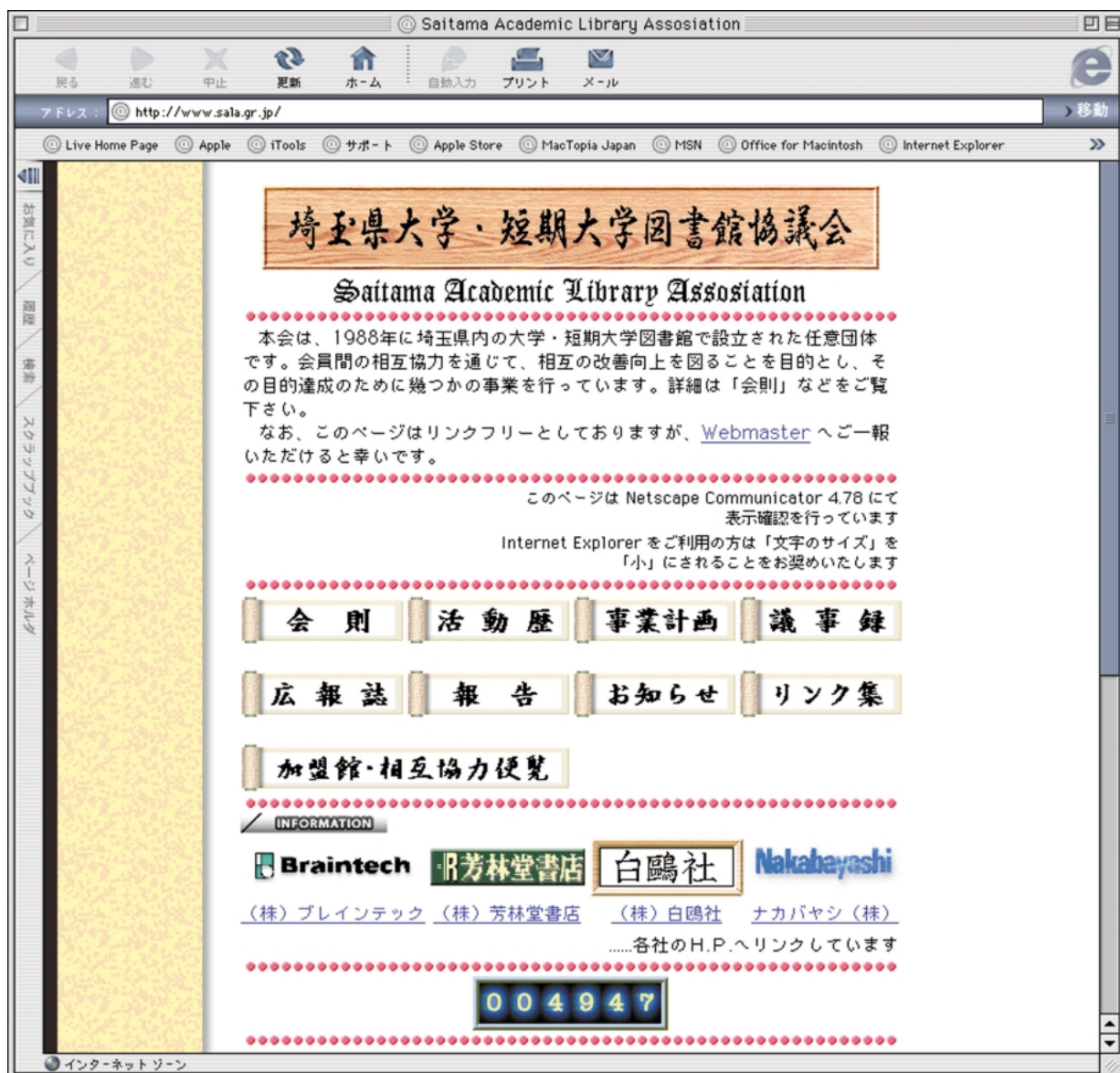
No.10

2002.3.31



会

報



「設立総会の1枚の写真」——定年で去るにあたって——



城西大学水田記念図書館

戸田 猛

SALA「会報」創刊号（1992年12月1日発行）の表紙を見ると、当初から関わった者としてなつかしい思いがするのである。14年の歳月にはそれなりの思い出と悔恨もまた残るものであるが——

この表紙の写真は、1988年5月19日・城西大学水田記念図書館棟で行ったSALA設立総会時に図書館の出入口階段で揃って撮ったものである。その後平成5年にこの出入口は改修工事により閉じてしまった。

城西大の人事のことであるが、写真に載っている事務長補佐の高橋清志君と武政恒雄君は他課へ異動があり、その後途中で退職してしまった。私としては後釜として期待をしていただけに残念だった。

写真の面々のことになるが、東邦音大の伊藤恵子さん、明星女子短大の遠藤恵子さん、共栄大の茂木代美さんの顔が見えるが総会等出席の常連である。ありがたいことである。長くお付き合いができることは運命の糸のつながりのようなものがある。

東京國大の田口稔さん、今は教務課長をしていると思うがこの方には個人的なことも相談し、図書館の各大学情報など親身になって収集してくれた。又、彼はSALAのためよく動き実行してくれた。SALA設立前半の陰の功労者である。

そして、聖学院大の上沢田浩さんは私と同じ吞兵衛である。吞兵衛にやや共通した天の邪鬼的な発想を持っているヒトであると感じた？

SALA設立準備とその後の運営で忘れることができない方が2名いる。既に定年で去ったが、文教大の松田上雄氏と埼玉大の小野崎好夫氏である。

松田さんは温厚且つ心根の強い方なので、彼の柱的存在がなければSALA設立準備は大分遅れたはずだ。一方小野崎さんは私と同年代としてのお付き合いもあり図書館に関するプロパーとしての自信もあったため大いに勉強をさせてもらった。そして小野崎さんは通風で足腰があまりスムーズでなかったが、「幹事会」後の懇親会には必ず参加してくれた。私が40数年「俳句」（俳人協会員）を作っていることから、ご自分も奥様も俳句をしているということで共通の話題があった。

ただ、残念なことが一つある。それはSALA設立の生みの推進役者である芝浦工大の山本二郎氏（既に退職

した）のことである。館内の人間関係があったのだろうが、設立総会に本人は参加せず課長が席上不参加の報告をした。我々幹事関係者としてはビックリした。いまだに未加盟である。

この会は当初から良識のある方々の集まりだったから、意見の食い違いはかなりあったが、とにかく先に進むことが必至であるということで妥協ができたことは、精神衛生上誠にさわやかであった。

仲間づくりは一見煩わしいし億劫になるし僅かな勇気も必要である。同質、異質の人格がぶっかり合い色々種々な角度から本業（図書館）、人間等に対する学習が、このような会の設立意義であると思えば何かのご縁で会った同志がおのおのの性格を出し合うことも大切である。

SALAの同志はどのような形のチームになるのか、どんな人的関係になるのか。最近のSALAのサークルを見ているといかにも事務屋の応対であり人間味には欠ける気がする。世代の相違だけで図ることができない気持ちの小ささがある。

リアルタイムになって、2001年9月21日の「幹事会」の後、東京國大の計らいと会費制で正門前の「居酒屋」での懇親会は、藤田、空林両さん（東京國大）、中林さん（目白大）、伊豆さん（大東文化大）、高野さん（東洋大）、近藤さん（十文字女子大）、井口さん（早大）、山口さん（獨協大）らと“越の寒梅”を注ぎ合いながら図書館の、自分の生き方などの情報交換をしながら時を忘れるほど話し合ったことも、いずれよい思い出になるに違いない。

是非、SALAの加盟館の方々、幹事会に入り限られた時間の中で人間同志が会った喜びをとっくりと確認し合うことも肯けることなのではなかろうか。

最後に私事になるが、本籍は旧浅草鳥越（現在は浅草橋になる）。戦前、親父（日本橋堀留生）が浅草で商売をしていて、昭和20年3月10日の東京下町大空襲では九死に一生を得た体験がある。

3回転職（富士写真フイルム〔南足柄町〕、朝日信用金庫〔台東区〕、協栄生命〔中央区〕）をし、そして商売を起こしたが失敗し城西大に流れ込んできた。やっと無事に65歳で職業履歴を卒業しそうだ。

太平洋に架ける橋——朝河貫一の生涯



東京国際大学国際関係学部教授

井出 孫六

歴史家・朝河貫一の名を知る人は多くはない。若くしてアメリカに渡り、その五十年の後半生をかの地に過ごし、骨をそこに埋めてしまったからでもあろう。日本の封建制度を研究し、欧米の歴史学界にいち早くそれを発信しながら、日本の歴史学界から孤立してしまっていたのは、彼の仕事がかつて英語で書かれていたからでもあろうか。最近まで朝河貫一の名は日本の歴史学界でもあまり知られてはいなかった。歴史の中に埋もれ、歴史から忘れられた歴史学者とでもよぶような存在になっていたともいえる。

朝河貫一は一八七三（明治六）年、福島県二本松の旧士族の家に生まれた。戊辰戦争のなかで、二本松藩は会津若松の先兵として壊滅的な打撃を受け、朝敵の汚名を着せられたから、父親は山村の小学校に奉職するほかはなく、貫一は清貧のなかで育ったが、県立安積中学を優秀な成績で卒えている。中学時代、英和辞書で単語をおぼえたあと、おぼえてしまったページを口のなかに吞みこんでしまい、あとに残った固い表紙を校庭の桜の根元に埋めてしまったという伝説があり、いまでも安積高校の庭に「朝河桜」が残っている。

東京専門学校（早大の前身）を優秀な成績で卒えた朝河は恩師たちに支えられてダートマス大学に留学し、ついでイエール大学の大学院で「六四五年の改革」、つまり大化の改新の研究で博士号をとり、のちにイエール大学で東西交流の歴史を講じ、日本史研究の礎をきざく道をきり開いていくことになる。

なかでも、朝河自らが掘り起こした鹿児島県入来院に残る中世古文書の精細な研究「入来文書」は初めてわが国封建制度の本格的な法制史的研究で、イギリスやフランスなど西欧に成立した封建制度ときわめて類似したシステムが東洋の島国日本の中世に実現していたという事実が西欧の歴史学界に大きな関心をよび起こしたことは、記憶されなければならない。

とはいうものの、わたしが朝河貫一の生涯に関心をよび起こされるのは、その学問的業績もさることながら、彼が生涯にわたって祖国に注ぎつづけた日本人としての視線にあるともいえる。

二十三歳で渡米した朝河は、十年目の一九〇六（明治三九）年冬、一年の休暇を得て帰国するのだが、日露戦

争の勝利に酔い痴れる祖国の姿にある衝撃を受けて、生涯に一度きりの日本語による著作『日本の禍機』という書物を書いている。西欧列強に伍して大陸侵略に歩を進める祖国への警告は、その後一貫して変わらず太平洋戦争の勃発までつづくのだが、一九四一年十一月、日米戦争の不可を説き、最後の手段として、ときの米大統領ルーズベルトを動かして天皇宛の親書を発案し、その効果は百万分の一と信じつつも、案文の筆を執る老歴史学者の後姿は感動的だ。

日本の歴史を透徹した眼で海の向うから凝視していたこの歴史家には、一九四一年の危機を回避できる唯一人の政治的権威は天皇にあって、天皇を動かせば開戦はくいとめることができるという認識で書かれた朝河の草稿は、ルーズベルト大統領の採るところとはならず、紋切型の書簡となり、それも天皇のもとに届いたのは、真珠湾攻撃のあとだったと伝えられている。百万分の一の可能性にかけた朝河の期待はむろん水泡のように消えた。

朝河の足跡を追ってイエール大学の東洋図書館、ワシントンの議会図書館を訪ねたわたしは、この二つの図書館の書庫の奥に、日露戦争の翌年帰国した朝河が、二つの図書館から託されてきた一万ドルの資金で蒐めた貴重な和書がいまも記念碑のように手厚く保存されているのを見て、朝河貫一という歴史家が生涯をかけて行なった事業は、異なる文化をもつ二つの国の間に横たわる太平洋に、相互理解という名の橋を架けようとしたことだったのだと気づいたのだった。

第13回SALA実務担当者 研修会概要

平成13年11月28日
立教大学武蔵野新座キャンパス
参加館数26館
参加者数35名

テーマ：電子化時代の図書館利用

今回の研修会は、電子化がもたらす影響を図書館利用の面から考え、講師による課題の整理、提案、そして各館の情報交換によってサービス向上に生かすことを目的としました。

全体会では、まず東洋大学社会学部で図書館学を講義する海野敏先生から、ネットワーク社会についての全体像や、その中の図書館の機能について講演をいただき、次に、鶴見大学図書館の長谷川豊祐氏から、図書館で実務を担当する立場から、実際に鶴見大学図書館で取り組んでいる具体策を講演していただきました。その後2グループに分かれて、講師によるコメントをはさみつつ各館の情報交換を行いました。

簡単に、講演の内容を概略させていただきます。

講演1：「ネットワーク社会における 大学図書館の新しい機能」

講師：東洋大学社会学部助教授 海野敏



1. 活字社会の図書館

まず、1980年代までの社会を活字社会、1990年代から現代を準ネットワーク社会、これからのデジタル化された社会をネットワーク社会と呼ぶ。図書館とは、情報と人とを効率的に出会わせる機関であるといえるが、活字社会での

図書館は、図書・雑誌・新聞などの記録、蓄積が可能なメディアを中心にコレクションの形成、理念としての網羅的収集と永久保存、アクセスへの利便を基本戦略としてきた。すなわち時間的・空間的に分散している資料を集中させ、将来起こりうる潜在的な要求にも応えられる広汎な選択と収集および長期の保存を行ってきた。またこれらの情報提供を補完する機能としてコレクションの組織化（分類、目録作成、書誌・索引作成、配架など）やレファレンス、相互協力などの人的サービス、スペースの提供などが行われてきた。

2. 図書館の社会的機能の変容

一方、情報流通の構造にも変化がみられる。パッケージ系（印刷メディア・CD-ROMなどのデジタルメディア）、通信系（TV・Radioなどのマスメディア）の普及からネットワーク系（Web・HP・メルマガ）の普及への変化である。そしてネットワーク系メディアの普及はオンライン書店、DDS・オンディマンド出版、古書市場など、出版流通に大きな変化をもたらした。これらの出版サービスは、ユーザーの個別の要求にこたえて提供されるわけで、この情報構造のなかで図書館は社会的機能の変容を余儀なくされていく。

3. ネットワーク社会の図書館

現代の準ネットワーク社会においては、まだ印刷メディアがまだ特権的な地位を保っているが、ネットワーク系メディアに関して言えば、活字社会の時代のコレクション形成や網羅的収集などの戦略は無効になってしまった。しかも、これからのデジタル社会＝ネットワーク社会（ネットワーク社会が到来するには、まだ、様々な条件が必要ではあるが）では、印刷メディアは特権的地位を失い、活字時代のような図書館の機能は必然的に縮小していく。

4. 大学図書館の新しい機能

では、これからの大学図書館には、どんな機能が求められているのか。情報技術の進展は、すなわち、情報源のデジタル化、ネットワーク化をもたらし、情報リテラシー教育の重要性はますます必要になる。従来までのパッケージ系メディアに対しては、収集・組織化・保管機能を継続していく役割のほかに、より個別的、能動的なレファレンスサービスが求められるだろう。また、学部や学科に合わせた資料の組織化、研究・教育活動のためのネットワーク化された研究成果と研

参加者の感想

実務担当者研修会は久しぶりの参加です。会場の立教大学武蔵野新座キャンパスも久しぶりの訪問です。以前は家も少なく、周りは畑だけのイメージだったような気がします。今回大分変わっていました、そのせいかちょっと不安でしたが無事会場に到着しました。

全体会では2つの講演、1つ目は東洋大学社会学部助教授海野敏氏による大学図書館を取り巻く社会全体からのアプローチで「ネットワーク社会における大学図書館の新しい機能」、2つ目が鶴見大学図書館主任長谷川豊祐氏による現場からのアプローチ「電子化時代における図書館利用：本学におけるホームページからのサービス展開」が行われました。

ネットワーク社会・電子化時代における影響や18歳人口減少に見られる定員割れ影響が、大学図書館に新しいサービスを展開させて来ている。図書館システムの変化、目録から閲覧重視、ホームページから図書館入館、電子ジャーナルの採用など。定員割れした学科では、顕著な貸出冊数（一人あたり）の減少が見られるとの事例報告が印象に残っています。それに研修の問題、これはどこの図書館も頭を痛めているのではないのでしょうか。鶴見大では、とにかく仕事をやらせるという方法、担当者にする。そうすれば自分で習得していくというお話でした。納得。

グループ討議では、司会者による進行方式でしたが、参加者全員に何を討議させるのか、明確な進行方針が見えなかったのが残念でした。

究素材の提供などが求められる。そして、ネットワーク系メディアを対象とした機能として、①どこからでもどこへでも・のネットワーク環境提供機能②大規模データベースへのゲートウェイ機能③人的支援としてのレファレンス機能④利用者のニーズに合わせた選別・組織化を行うフィルタリング機能⑤学内のデータの編集・公開などのエディトリアルセンター機能があげられる。

最後に、これまでの空間とコレクションに加えて、擬似空間とネットワークが必要になった。今後、図書館はますます多業種、多業界も含んだ質の競争の時代を迎える。ネットワーク系メディアを扱う十分な知識と技術、ネットワークとパッケージを統合するサービス、そしてあえてマーケティング用語を利用するなら、より詳細な消費行動の的確なキャッチアップ（消費者＝利用者は何をまとめて行動するのか）が求められるだろう。

講演2：電子化時代における図書館利用
：本学図書館におけるホームページからのサービス展開
講 師：鶴見大学図書館 長谷川豊祐



1. 直面している課題

●大学を取り巻く環境の変化

<<http://www.geocities.co.jp/Berkeley/4106/20010309nagoya/20010309.doc>> 参照

まず、大学を取り巻く環境—少子化による定員割れ、IT化、多様化、グローバル化—の変化を捉え、その変化への対応をするためのツールとしての図書館のIT化を考えたい。今後は高等教育機関の財政基盤が上向くことはないという経営状況を認識していくこと、その上で図書館の管理運営を考え、図書館に期待されているサービスとは何かを議論していくことが必要である。

最後に、本協議会には一人職場に近い短期大学図書館も加盟しているので、(むしろ多いと思います) 少人数職場に対する研修会も検討したらどうでしょうか。また、高校図書館との交流会の企画もどうでしょうか。研修会の企画運営を管理職ではなく、現場の担当者を入れた実行委員会形式というものもどうでしょうか。ぜひ検討してください。

(城西大学水田記念図書館 小宮 隆志)

活字社会(—1980年代)からネットワーク社会(20?0年代)への移行の中での図書館の変容についての講義から、ネットワーク社会到来の条件が揃えられつつある様子がわかり、これからの図書館がどのように変化していくのか期待できました。

大学図書館の顧客満足のためには、図書館にきている学生のためではなく、大学に来ている学生を満足させるべきでなく、そこでは、大学がこうありたいと言う姿に即した図書館のありかたが問われる。では、図書館はIT化をどう利用するのか?

●変化への対応

<<http://www2d.biglobe.ne.jp/~st886ngw/ej-url.htm>> 参照

変化への対応には、まず、図書館員のスキルアップが必要である。現実には、組織にスキルアップのための何かを期待できない。個人的な努力、自己投資が求められる。そこで、情報提供の入り口として、図書館ホームページを利用し、それを作成し上手に利用することで図書館員自身の情報リテラシーも向上させられるのではないかと。

2. ミッションを明確にする

図書館にもとめられているものはなにか、抽象的なプランではなくその使命をはっきりさせることが必要である。そこで明確にした使命の一つは、ここ数年の利用者の減少に対応し、具体的な数値目標として入館者数・貸出冊数の増加をめざすこと、もう一つは、直接サービスとしての授業と教室外の学習支援の強化である。

3. 具体的な方策をたてる

明確になったミッションの実現に向けての方策として、ホームページを利用する。具体的には、

- ・システムは図書館員の仕事のためでなく、利用者の使いやすさのものにする。
- ・図書館ホームページを開くことによって始まる利用案内や、OPAC。
- ・紙媒体の図書館報「アグラ」を発展的に解消してのホームページでの一元的管理。
- ・図書館内の組織を改革して、学生サービス重視、整理部門を縮小しても閲覧重視へ再編。
- ・大学広報での図書館や図書館職員(カウンター担当)紹介。
- ・カリキュラムへの対応。
- ・図書館ガイダンスと授業との連携。
- ・就職支援など。

最終的には、電子化時代といっても大事なのは「人」の力なのではないか。

また、事例から利用者へのレファレンスサービスが大事であり、図書館員としての自覚の大切さを感じました。

グループ討議により、各館の情報交換がなされ、様子がよくわかりました。参考にさせていただきます。また、資料の中から「ハイブリッド図書館」に興味をもちました。

大学の教育サービスの一つとして、卒業までに学生の付加価値を個人の資質に応じて伸ばすことが考えられます。そのために図書館は授業と連携したサービスの向上が求められています。利用者に学ぶ愉しさを知ってもらうことや、情報活動能力を身につけて送り出すことが必要であり、そのために利用しやすい図書館にすることが、サービスの向上につながると思います。

(国際学院埼玉短期大学附属図書館 薮島 千枝子)

東洋大学付属図書館朝霞分館の 地域開放

朝霞分館の概要

- 所在地** 東部東上線の朝霞台駅と武蔵野線の北朝霞駅から徒歩10分
- 利用者** 文系5学部の1、2年次生約8,200人と教職員
- 蔵書** 図書約24万冊、雑誌約2,400タイトル、視聴覚資料約11,000点
学習用図書が中心で、約9割が和書で、ほとんど開架です。
- 開館時間** 9時～19時（土曜日9時～16時）
- 職員** 10人、アルバイト8人

地域開放の経緯

平成3年、地域に開かれた大学作りの一環として、近隣4市（朝霞市、志木市、和光市、新座市）の高校生を対象に、当初は席貸しとして利用者の少ない時期、夏季休暇中に限って様子を見ながら出発しました。

利用は閲覧と複写のみとし、来館時に申出て氏名を記入すれば入館できることとしました。当時の統計を見ますと、平成3年夏季休暇中の16日間で、450人、平成4年 17日間で、555人、平成5年 15日間で、200人の高校生が利用しました。

その後平成7年には140人まで減少しています。（もっともこの数は、記名した人のみです。当時の入館システムではフリーに入れたので、正確な数ではありません）これは、近隣に図書館などの施設が充実してきたこと、家庭環境で冷房が普及したことのほか、当館が学外者に館外貸出しをしないこと、夏季休暇中なので閉館が多いこと、開館時間が短いこと、駅から距離があることなどの原因が考えられます。

そこで、平成8年から利用方法（閲覧、複写のみ）は変わらないのですが、利用できる時期を、1、2、7月の本学生の定期試験および入学試験の時期を除く通年、対象者も中学生以上の4市市民としました。現在もこの形で継続中です。この変更によって、利用者は平成12年の入館者は1,051人、平成13年は半年で837人と大幅に増えました。

なお、平成11年に入館システムを変更したのでこの数字は正確です。

この一般的な市民開放とは別に、朝霞分館では、朝霞キャンパスで開催される市民大学講座（受講可能対象者は前記の4市市民）を受講する市民の方へは、受講期間中、館外貸出しを含む利用を実施しています。

また、SALAの加盟大学の学生・教職員は、共通閲覧証によって館外貸出しを含む利用ができます。

利用範囲の拡大

- ・館外貸出しについて、現状では前述の市民大学講座受講生およびSALA加盟大学学生・教職員を除いて、個人への貸出しを行っていませんが、図書館間の相互貸借サービスの一環として、公共図書館への貸出しは行なっています。ただし、これもそこから先が問題で、現状では貸出した図書館から外への持ち出しができない方式を取っています。個人に貸してはいけないのかという問い合わせを以前、公共図書館から受けたことがあります。
- ・インターネット、レファレンス、視聴覚資料の視聴、他キャンパスからの取り寄せ、閉架書庫への入庫、それぞれが、学内利用者優先のため基本的には利用できませんが、要求があれば時期、時間を勘案して利用してもらうこともあります。例えば、学生休暇中とか、17時以降など。
- ・利用対象者については、当初から4市以外の方が来館しても断らない方針でできています。他大学の学生、教職員の方は、一応紹介状の有無を聞き、今回は持参してきてくださいと言いますが、来館した人に閲覧を断る事はいまの所ありません。高校生とその保護者の見学あり、大学間の単位互換協定あり、図書館間のコンソーシアムありで、そして昨今はインターネットで蔵書の検索が容易にできる事もあって利用者の範囲は拡大の方向です。

広報について

平成3年以来、4市の市役所、教育委員会、高等学校、公共図書館に案内を送っています。開始した当時は直接市役所の担当者に会って、趣旨を説明し、市の広報誌に記事を掲載してもらいました。

現在は、公開の案内を図書館の利用案内と開館日程表に同封して送っています。

ちなみに、この案内には開放ではなく公開という言葉を使用しています。

その他

このような、地域への開放も、東洋大学を対外的にアピールするという意義を根底に持ち、分館という業務量・蔵書、多少の地理的不便さで、一挙に市民の方が押し寄せる事はないという条件、図書館の建物に試験期以外は余裕が多少あるということ、学外者へのサービスを制限していることなどから、大きな負担を感じずに実施できています。

ただし、市民の方がどういう要求、感想を持っているかは聞いていませんので、アンケートなどで聞いてみたい気もします。

市民開放の過渡的な形ですが、現状を報告させていただきました。

（東洋大学付属図書館朝霞分館 高野 光代）

早稲大学所沢図書館の 地域開放について

1. 実施に至る経緯

所沢図書館の地域開放については実は創設当初からの懸案でした。1987年、図書館創設の基本構想には利用者の範囲に地域住民も含まれていたのです。しかしながら実際の開放は設立12年後の1999年になってしまいました。開放実施の直接のきっかけは1995年に行われた早大奥島総長と所沢・飯能・狭山・入間の4市長との座談会です。この会で大学図書館の開放も話題となりました。これを契機に改めてその実行に向けて条件、方法等を検討し、学内的承認も経て1999年10月、ようやく実施に至ったものです。開放に関する広報等について所沢他4市立図書館のご協力も得ることができました。

2. 開放のルール

- ・所沢、入間、狭山、飯能、日高の5市に在住・在勤する20歳以上の人
- ・氏名、現住所(職場の住所)が確認できるもの(運転免許等)を提示し登録します
- ・登録者には利用票を発行し、来館の際にはその利用票を提示してもらい入館カードを貸与します。基本的には所沢図書館の資源は原則すべて利用可能としますが、高額な学費を納入している学生と同様の条件では逆に支障も生じるため利用の制限もつけました
- ・館外貸出はしない
- ・インターネット端末の利用は可ですが、その中の有料データベースのアクセスは不可。
- ・学内外のILLはしない。(これは中央図書館等学内の他館に影響を及ぼさないで所沢図書館に限定した制度であることを明確にするためです)

その他の制限として

- ・開放の趣旨は個人利用なので営利会社等組織目的のための利用は不可。

だいたい以上のような大まかなルールで実施に踏み切り何か問題があったらその段階で改正を検討することになりました。

3. 2000年度一年間を通した利用実態

年間登録者数は下表のとおりです。

地域別	人数	年代別	人数
所沢	148	20～29	74
入間	36	30～39	38
狭山	15	40～49	31
飯能	8	50～59	30
日高	1	60～	35
計	208		208

- ・所沢市民が多いのは地理的条件からして当然のこととされます。こちらの予測としては生涯学習を目指す

定年退職者層が多いことを想定していましたが若い年齢層が多いことは意外でした。この中には他大学の学生も少なからず見られます。

- ・日高市からの登録者は1名で結果的にはあまり意味がありませんでした。地理的に遠いということもありますが、他の4市の公共図書館が提携関係にあるのに比べ日高市は独立した運営をしているため、広報面でも不足だったのではないかと思います。
- ・実際の入館者数が年間延べ955名もあったことは予想外でした。もっと低いと予想していましたが、数字だけでみるとこの地域開放は歓迎されたと受け止めてよいと思います。

データとしてはここに提示しませんが、利用の実態を更に詳しく調べました。

- ・登録者全208名のうち92名(約44%)が利用回数1回のみというのは大学図書館の地域開放の話を聞いて一度は覗いてみようという物珍しさでの利用とみられます。また登録しただけで実際の利用が0回という登録者も31名いたことは、大学のキャンパスと図書館を見学した後、登録のみ行ってその後の利用がないいわば「記念登録」でしょう。
- ・複数回利用している人の動向をみると、3回以上来館の方は若年層が多い。しかし、20回以上利用の方をみるとその比率が逆転し高年層が多くなっています。これは継続して読書などに宛てる時間が高年層の方が比較的多くもてることの反映でしょう。逆に若年層は何らかの調査が必要な時に来館するのではなからうかと思えます。
- ・曜日別での利用者数でみると月曜と土曜が飛びぬけて多い。月曜は日曜勤務の方の休日となっているためでしょうか。あるいは公共図書館が休日のためでしょうか。その理由は判然としません。

4. 自評

全体的にみてこの開放実施後のこの約2年間は特に問題もなく順調に運営できたのではないかと、と思います。

当初は市立図書館の方から歓迎されざる市民も来館するのではないかと懸念も示されましたが、幸い市立図書館の方の杞憂に終わったようです。しかも、数字上では予想を上回る利用実態が記録され、一応市民の方にも定着し歓迎された制度ではないかと自評しています。

(早稲田大学所沢図書館 井口 牧二)

活動報告 2001

東京国際大学図書館 空林 徹

●会報第10号の発行(2002年3月31日)

第4号から、発行は3月末日になっている。

表紙は「SALAホームページのトップページ」。

●第14回総会(2001年6月2日)

第14回総会を、東京国際大学金子泰蔵記念図書館において開催した。

協議した案件は、(1)平成12年度決算について(2)平成13年度事業計画について(3)平成13年度予算について(4)幹事館および会計監査館の選出、等であった。総会では、いずれの案件も原案どおり承認した。幹事館を辞退する明の星女子短期大学図書館と文教大学越谷図書館に変わり、埼玉女子短期大学図書館と目白大学図書館の就任が承認された。会計監査館は12年度に引き続き聖学院大学総合図書館にお願いした。

また、新規加盟館として人間総合科学大学図書館、埼玉学園大学情報メディアセンターの2館が承認された。

続いて、東京国際大学国際関係学部教授井出孫六先生による「太平洋に架けた橋?『朝河貫一』評伝から?」の講演があった。総会の参加館及び人数は、26館名であった。(これ以外に委任状提出16館あり)。総会終了後、有志による懇親会を行った。

●研修会(2001年11月28日)

第13回実務担当者研修会を、立教大学新座キャンパスにおいて開催した。「電子化時代の図書館利用」をテーマに、東洋大学海野敏先生と鶴見大学図書館長谷川豊祐

氏に講演をいただき、2つの分科会において研修を実施した。参加館及び人数は26館35名であった。

●その他

SALA通信9号を発行した。10号を4月末に発行予定。

●幹事会

幹事会は総会で選出された幹事館で構成し、当会の運営に当たっている。2001年度は3回の幹事会を開催した。分担は以下のとおり。

代表幹事	東京国際大学図書館
企画	埼玉大学附属図書館 東京電機大学総合メディアセンター 東洋大学附属図書館朝霞分館 埼玉女子短期大学図書館
広報	大東文化大学60周年記念図書館 早稲田大学所沢図書館 獨協大学図書館 埼玉女子短期大学図書館
相互協力便覧	淑徳大学みずほ台図書館 十字学学園女子大学情報・資料センター
ホームページ	淑徳大学みずほ台図書館 十字学学園女子大学情報・資料センター
庶務	城西大学水田記念図書館
会計	目白大学図書館
会計監査	聖学院大学総合図書館

BookWeb Pro

教育・研究機関向けオンライン書店! 充実の選書ツール! 精選の書籍!

<http://bookwebpro.kinokuniya.co.jp>

株式会社 紀伊國屋書店 e-mail: to_kita@kinokuniya.co.jp

おかげさまで120周年。

株式会社 三省堂書店
北東京営業所

〒123-0872 足立区江北7-11-8

Tel 03-3896-7255 Fax 03-3896-6331

The Times
Comprehensive
Atlas of the World
Millennium Edition (10th Edition)

好評発売中

総輸入発売元 株式会社 雄松堂書店 <http://www.yushodo.co.jp>

世界に日本文化のネットワーク
JPTC 日本出版貿易株式会社
Japan Publications Trading Co.

詳しくは <http://www.jpico.co.jp>

〒101-0064 東京都千代田区猿楽町1-2-1

TEL: 03-3292-3755 FAX: 03-3292-8766

ESTABLISHED IN 1869



【大宮営業部】

☎(048)641-7221

本社=東京・日本橋

〒330-0843 さいたま市吉敷町1-41 明治生命大宮吉敷町ビル4F

徹底した教育と最新の設備で
これからを創る。



情報を最適なメディアで—
望月印刷株式会社
<http://www.avenue.co.jp/>

■本社工場 〒338-0007 さいたま市円阿弥5-8-36
TEL 048(840)2111 代表 FAX 048(840)2121

会報 第10号 2002年3月31日発行

編集: 大東文化大学60周年記念図書館、獨協大学図書館、埼玉女子短期大学図書館、早稲田大学所沢図書館

発行: 埼玉県大学・短期大学図書館協議会 <http://www.sala.gr.jp/>

代表幹事館・事務局

〒350-1197 川越市の場北1-13-1 東京国際大学図書館 ☎0492-32-1111 FAX0492-32-4829

印刷: 望月印刷株式会社 〒338-0007 さいたま市円阿弥5-8-36 ☎048-840-2111 FAX048-840-2121